日本語教育実践研究（8）
―「漢字教育実践研究」―

鈴木　義昭

本実践研究（7）は、漢字指導Ｃ（7、８レベル）を基礎・実習クラスとして、教育実習（教壇実習、採点・成績実務、学生指導）を行いました。授業面では、今学期からは、教科書『漢字　７－８』(「早稲田大学外国学生用教科書」　早稲田大学漢字語彙教育研究会編　2006.4）を用いて授業をすることになりました。本書の原形は、筆者がここ数年間実施したプリント教材が主になりますが、付録として「(中国の）漢字の歴史」、「日本の漢字」、「漢字と表記」等もつけておきました。

「漢字指導Ｃ」では、「漢字教育は語彙教育でもあり、発音教育、文法教育、文章・口頭表現でもある」を教学の根本において臨んでいます。ここで言う漢字教育とは、日本の国語教育で行われているそれでもありませんし、従来の日本語教育が場当たり的に対処し、等閑視してきたものでもありません。少なくとも、日本語という総体の、焦点の一つを形成するものと言ってよいでしょう。例えば、小さくは、漢字熟語（二字、三字、四字等）中の「連声」現象、語中の「平板化」現象が果たす役割等。大きくは、文節の冒頭に漢字語彙が来ることから、一文中の息の切れ目、意味の切れ目、文法的な切れ目が現れること。こうした点では、同じ漢字を使っていても、中国語（＝現代漢語）の漢字とは似て非なるものとなっています。漢字圏の学生、非漢字圏の学生を問わず、こうした原則を徹底したいものだと考えています。

今期の実習生名とその題は以下のとおりです。

教育実習

邱麗君：「類義語について」
　　「呉音・漢音・唐音」

闕茹玉：「対義語」
　　「同音異義語」（漢字の一つが共通しているもの）

臧昉　：「同訓異義語」
　　「身体語彙に関する慣用句」

董毅敏：「同音異義語」
　　「間違いやすい漢字」

龍熠　：「形声文字」
　　「二字熟語の読み方」

（スズキ　ヨシアキ・日本語教育研究科教授）